



プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

2010年12月30日 18:55:49

2010年12月30日 18:55:49

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

<請求票>

Call Slip

3892
26
43

<請求票> (控)

資料名: 支那国民性と経済精神

巻次:

著者名: 大谷孝太郎 // 著

出版者: 巖松堂書店 頁数: 339p

大きさ: 22cm 出版年: 1943

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンタ

配置場所: 1/261 中)2F社会(閉)

資料ID: 1121285382

一	社	人	自	東	新	力	事
一	社	人	自	東	新	請求	報告
MB1	マイク	B1	アルファベット	原紙	縮刷		
MB2	マイク	B2	洋	中	朝		
行	1F	B1	B2				
多	児	青	1F	B1	B2		

書名
資料名: 支那国民性と経済精神
巻次:
著者名: 大谷孝太郎 // 著
出版者: 巖松堂書店
出版年: 1943
大きさ: 22cm
頁数: 339p

所蔵館: 中央

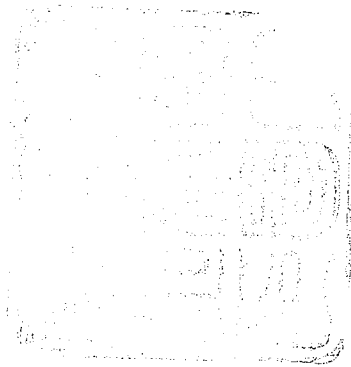
所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンタ

配置場所: 1/261 中)2F社会(閉)

資料ID: 1121285382

請求記号
3892
26
43

序 1~4
目次 1~6
本文 26~70



序

國民を一個の精神的、人格的なる實在と觀る時、其の精神構造又は性格といふものが考へられ、そこに國民精神構造又は國民性なる概念が成り立つ。民族に於ても亦其れが一個の精神的なる實在と觀ることの出来る限りに於て、民族精神構造又は民族性なる概念が成り立つ。然るに、國民性又は民族性は、由來學問的には手厚く取扱はれて居らない。諸國民諸民族の總力的且世界觀的抗爭のさ中なる今日國民乃至民族の問題の學問的討究には、躍進の目覺しきものがある。に拘らず國民性乃至民族性の問題は冷かに取殘されてゐる。國民性又は民族性がかくづ、れ、い、なく扱はれてゐるのは理由あることである。其れは、とりもなほさず國民又は民族を一個の精神的、人格的なる實在と觀ることが困難なことであり、取り分け、名目主義的社會觀に立つ限りに於ては、其れがむしろ忌むべきことだからである。吾々が舊き名目主義の囚はれから脱し、國民乃至民族の如き團體も亦儼として實在するとの社會觀に進み入る時、國民又は民族を一個の精神的、人格的なる實在なりと觀ることは、殆んど不可避的である。従つて、國民性又は民族性の概念の儼たる實體性を仰ぎ見、之を學問的に手厚く取扱はむことは、正に必須の業である。

筆者は右の見地に立つて支那國民を望み見年來支那國民性の推究を試み來つた。然し、支那國民の歴史的社會的事象は餘りに悠久龐大複雑である。筆者は夙に支那國民性其のものを捉へむことは斷念すべきを悟つた。たゞ支那國民性の實體性を認め其れを念頭に置いて支那國民事象を理解するといふ支那國民認識の領域が存し其れ丈が吾々の立ち入り得る領域なることを發見した。此の領域は本格的なる支那國民性の學ではなくして國民性的なる支那國民事象の學又は國民性的支那研究である。支那國民性の實體性を論じ之を念頭に置いてする支那國民事象の學の必須を説き國民性的支那研究の若干の試みを展開したものが本書である。本格的なる支那國民性の學の大成は之を後代に期すべく本書試みる所の國民性的支那研究が其れへの踏石として聊かでも後代に役立つ所あらば筆者は無上の仕合せと思ふ。

本來かうした問題の處理は文化史家乃至東洋史家の仕事である。歴史に門外漢である筆者の如きが業餘にかゝる試みをなしたことは大それたことである。其の位に在らざることを筆者も承知してゐる。それに拘らず此の分外の試みに思ひをひそめ素人技に過ぎない其のさやかな成果を公けにするの大膽を敢へてする所以のものは文化史家乃至東洋史家が手を下すのを拱手して待つことが出来ないが故である。切に専門家の宥恕を請ひ度いと思ふ。

筆者本來經濟學の領域の人間として専ら支那國民の經濟生活に關心を持ち只管支那經濟の理解に専念し來れるものである。實のところ筆者の本領たる支那經濟の理解を掘り進めて行く中に筆者は支那國民性といふ岩盤に逢着したのである。此の岩盤をくぐり抜けなければ支那經濟理解の主脈に到達し得ないと考へたので此の岩盤に向つてがむしや、らに腕押しをし懸命に之をまさぐつて見ざるを得なかつたのである。さうして得た所のものが即ち此の國民性的支那研究なのである。國民性的支那研究は聊か念入り過ぎた嫌ひはあるが筆者の本領たる支那經濟理解の序論である。本書中支那經濟精神に就いての私見は支那國民精神構造の經濟的方向として支那國民經濟生活を捉へむとしたるもの即ち支那國民性の實體性を念頭に置いて試みたる支那經濟の理解の一端であつてこれこそが筆者の本領に觸れるものである。

本書は大體に於て筆者の此の五六年間に於ける既發表未發表の論文を支那國民性概念と其の一方向たる支那經濟精神とに向けて收束したるものである。既發表の或るものには大斧鉞を加へた。緒論に於て筆者は國民性概念一般を特に支那國民を題材として之が樹立を企て支那國民性の學は斷念すべきも國民性的支那研究の可能且必須なることを説いた。而して支那國民性と支那人性格とが峻別すべき概念でありながら典型的支那人性格が支那國民性の或る程度の縮圖であり典型的支那人性格の分析も亦國民性的支那研究

の一と認むべきことを聊か高調した。前編に於ては、右に基づいて、典型的支那人性格の分析を試み、其の現れとして若干の現實なる重要事象の考察を試みた。昭和十年末、筆者は「現代支那人精神構造の研究」なる書に於て同じ見地に立つて現代支那人性格分析の企てを世に問うたのであつたが、右著者は本書緒論並びに前編の中におほよそ之を揚棄し得た様に思ふ。後編に於ては、支那經濟精神に就いての私見を披瀝したのであるが、支那國民性の實體性を念頭に置いて試みたる若干の國民性的支那經濟理解であつて、これこそが敍上の如く筆者の本領に屬する。

本書に収録の論文中既發表のものに就いて、筆者は之が發表の機會を興へられたる研究諸機關の寛恕を請はなければならぬ。特に、後編第四章「支那資本の性格」の収録を諒恕せられたる東京商科大学東亞經濟研究所當局の大度を有難く思ふ。

昭和十七年十月

老松巒蒼たる彦根城を

窗外指呼の間に望み見つゝ

大谷孝太郎

支那國民性と經濟精神・目次

緒論	支那國民性の實體性	一
一	總説	一
二	支那國民事象の全體性	五
三	支那國民の自我性	三
四	支那國民の實體性	三
五	支那國民性と支那人性格	三
六	精神科學的支那研究	三
前編	現代支那人の性格と世界觀	三

第一章	現代支那人の性格	三
一	日滿支新秩序の建設と現代支那人の性格	三
二	現代支那人の性格	四
三	現代支那人性格の超克	六
第二章	事變に現れたる支那人の世界觀	七
一	支那事變を繞る三大陣營	七
二	事變の發端に現れたる支那人の世界觀	八
三	事變の經過に現れたる支那人の世界觀	九
四	南京陣營の歸趨	九
第三章	大陸に於ける「徹底戰」	九
一	大東亞戰爭右翼の驚異	九
二	「不徹底戰」と「徹底戰」	九
三	大陸に於ける「徹底戰」	一〇
四	「徹底戰」と支那人世界觀	一〇
五	大陸に於ける「徹底戰」の超克	一〇
第四章	英支勾結の世界觀的根柢	一一
一	英支勾結に對する諸見地	一一
二	民族主義精神	一一
三	王道とデモクラシー	一一
四	君子と紳士	一一
五	面子と發財	一一

六 英文句結の破摧 二五

後 編 支那人經濟生活及び經濟精神 元

第一章 「君子經濟」概念 元

一 君子の經濟生活の宣揚 元

二 君子の生活狀態 二五

三 君子の個別的經濟生活 二五

四 「君子經濟」の概念 二五

第二章 論語に見ゆる君子の經濟生活 二五

一 新東亞の文化建設と支那文化の宣揚 二五

二 論語に見ゆる諸々の類型的人間 二六

三 論語に見ゆる君子の精神構造 二七

四 論語の經濟關係諸章句 二九

五 論語に見ゆる君子の經濟生活 三〇

六 新支那經濟建設と「君子經濟」 三二

第三章 貧 樂 精 神 三三

一 支那人の貧樂生活 三三

二 曾國藩の貧樂思想 三四

三 貧樂思想の原流 三五

第四章 支那資本の性格 三六

一 支那資本の質の問題 三六

二 支那資本の國民性的特徴 三五

三 支那資本の國民性の展開 三六

第五章 支那人企業自存力の精神的根柢	三〇
一 新東亞配給機構の建設と支那人企業の自存力	三〇
二 支那人企業の形態	三四
三 支那人企業と同業團體	三〇
四 支那人企業に於ける因縁費用	三三
五 支那人の低生活	三四
六 勤勉及び安分	三五
七 信義と共存	三六
索引	三十一頁

目次・畢

支那國民性と經濟精神

緒論 支那國民性の實體性

一 總 說

時代的に悠久なる支那である。地域的に歴大なる支那である。底知れぬ種相を経験し包藏する支那である。此の支那に就いて一口に斯様々と云々することは蛇に怖ぢぬ盲者の膽力なくて出来ることではない。言ひ纏へれば、支那を知らずして支那を語る勇者にしてはじめて出来ることである。支那は其の時間的空間的廣袤と内的多様性との故を以て、時に全歐洲に比擬せられるが、げに支那に就いて支那國民といふ一個の歴史的社會的實在を思念せんことの難きは、全歐洲に就いて歐洲國民といふが如きを思念せんことの難きに異らぬ。これは達識者の百も承知の所である。

に於て存するものと考へなくては濟まされぬといふ意味で、必須の概念である。

かくる實體概念として支那國民性又は支那國民精神構造を支那國民に對して適用することは、實證主義に立籠り、實證的なることこそ科學的なる所以なりとし、支那國民の歴史的社會的事象を精神作用として之が認識を理解といふ仕方に依らうとしない所の、いはゞ、精神科學的ではなくして自然科學的な支那研究の許容しない所である。むしろ、其の蔑視又は敬遠したがる所である。けれども、精神科學的な支那研究にとりては支那國民性乃至支那國民精神構造は誠に必須の實體概念である。

五 支那國民性と支那人性格

社會心理學者マクドゥガルに従へば、國民性 (national characteristics) の語には二様の意義があつて、其の一は國民を代表し、國民の典型である様な個人の性格を意味し、其の二は一つの集團全體としての國民の有する特質を意味する。一は一國の人民の內的性格 (innate characters) 若くは人種種族夫々の精神構造の內的相違 (innate differences of mental constitution) を意味し、二は國民夫々の傳統的表現 (expressions of different traditions) である⁷⁾。支那國民性の語にあつても正に同

様であつて、支那國民性を以て上論の支那國民に認めらるべき自我に對して考へられる法則性の總體、簡單にいへば、支那國民の右に言へる傳統的表現を意味せしめることもあるが、支那國民性と稱して支那國民を代表し、支那人の典型である様な個人の性格、一言でいへば、典型的支那人性格を意味することが極めて多い。この典型的支那人性格は概念として支那國民性とは峻別せらるべきものであつて、混同を許されない。支那國民の精神作用の統一的法則性を支那國民性といふならば、典型的支那人性格は飽くまで支那人性格といつて支那國民性と稱してはならない。

7) W. McDougall, An Introduction to Social Psychology, p. 329—330.

然しながら、左の精神科學的心理學の見地は無視すべからざるものである。「各個主觀の全體或は部分構造の作業が共同して一の客觀的沈澱を呈する限りに於て集團的精神が成立する。……かくて、局限せられた偶然的な個我の上に超個人的意義の精神世界が浮び上る。而してそれは歴史的発展に於て生長し、變形せられ、往々にして破壊せられる」。「客觀的精神 (精神的内容を持つる超個人的形象) が其の合價值的或は反價值的内容を以て人間個々人の體驗と創造とに其の根柢を有することに疑ひない。此の個々人の體驗並に創造に依つて客觀的精神は生起したのであり、之等に於て客觀的精神は不斷に新たに生命にまで呼び醒されねばならぬ」。「結局に於て生活の諸

合成を本來極めて單純なる諸主律の錯綜として理解すべく、吾人は精神的な個々主観を出發點としなければならぬ。實際吾人は常に多數世代によりて生産せられ全集團によりて負帯されてゐる所の一の客觀的精神的媒介物に於てのみ之を見出す。されど、社會的相互作用と集積とは本來精神的な生活が擴大し分岐する所の形式に過ぎざることを忘れてはならぬ。むしろ、精神的なものが其れ自身既に個人の中に傾向として生きてゐるべき筈である。然らずして、精神的なものは個人の中に見出すべからずとせば、多數の零を集積して依然零を得るのみ。「縱令、社會的に結合せられ決定せられ居るにしても飽くまで個別精神が文化體驗の舞臺である」。畢竟、一社會一國民の歴史的社會的全事象は個々人の精神構造の中に息づいてゐるのである⁸⁾。

8) F. F. Leung, p. p. 〇. 社氏圖書全集二七二八、四〇、四九—五〇、等。

此の見地に立つて觀る時、支那國民の場合、支那國民事象全體は、畢竟、支那人個々人の精神構造の中に息づいてゐることに考へ及ばなければならぬ。そのことは、とりもなほさず、支那國民性は支那人格の中に息づいてゐるといふことである。然りとすれば、支那國民性と支那人格と、兩者全く異なる概念でありながら、支那人格は支那國民性の縮圖であると謂へる。

個人的なるものにもせよ、國民的なるものにもせよ、精神構造又は性格に於ては全人生々活の

諸領域に對する根本的な評價態度即ち世界觀が其の根柢をなす。支那人格が支那國民性の縮圖である限りに於て、支那國民の世界觀は支那人の世界觀に其のまゝ讀取ることが出来る。

勿論、支那國民性の縮圖たるべき支那人格は典型的支那人格でなければならぬ。任意の支那人個人の性格は支那國民性のほんの斷片をしか擔つてゐないであらう。而して、支那國民を代表するものであるべき以上、張三李四といった様な、典型的な支那人衆庶の性格よりも、典型的な支那人賢能の性格の方が豊かに支那國民性を擔つてゐるであらう。蓋し、精神科學的心理學も謂つてゐる様に、「一定の文化意識と一定の歴史的意識との段階にまで自己を高めた所の一の個人精神」の中に於てこそ支那國民性は息づいてゐる筈であるからである。

典型的支那人格を以て支那國民性の縮圖なりとしても、充分なる其の縮圖では勿論あり得ない。第一、前述精神科學的心理學も説けるが如く、社會的相互作用と集積とは本來個人の精神的な生活が擴大し分岐する所の形式に過ぎないにしても、國民事象(生活の諸合成)は多數世代によりて生産せられ全集團によりて負帯されてゐること、つまり、傾向として既に個人の中に生きてゐるにしても、其の現實の姿は社會的集積過程を経た結果なること、を惟ふ時、典型的支那人格は決して充分なる支那國民性ではあり得ない。第二、抑々、典型的支那人格は果して何れな

りやを見定めることは容易ならぬ。支那國民性そのものが先づ興へられてゐない限り、實在的個人たる孔子、老子、王莽、孔明、岳飛、袁世凱、康有爲等々、孰れを拉し來つてもこれこそが支那歴史を一貫する典型的支那人性格の持主であると斷言することは出來ないであらう。然らば、之を實在に即して構成せんとするには、その方法は概括的抽象に據るべきでなくして、理念的抽象に據るべきであるが、支那歴史を一貫して支那國民を代表する様な人間型を構成することは眞に至難のことである。假りに之が構成を試みても、それは支那國民を代表すると覺しき人間型、一應典型と見える支那人性格でしかあり得ない。所謂、典型的支那人性格は支那國民性の縮圖として極めて不充分なる縮圖でしかあり得ない。

六 精神科學的支那研究

支那國民性は支那國民に考へられる精神作用の統一的法則性の總體である。片々たる一二の法則性ではない。個人の精神でも其の全構造は決して單純なものではない。況んや廣袤多様な支那國民のこととて、支那國民性又は精神構造は宏壯複雑極まりなく正に吾々個人の知力を超越する。卒爾として之が全貌を精緻な姿に於て捉へんと企つるが如きは、それこそ、龍車に向ふ螻螂

の類である。支那國民性を對象として眞向から之が全貌を精緻な姿に於て捉へんとするが如きは學問として企てらるべきことではない。さる企てが群言古語を註する以上に出で得ないことは豫め明かである。

だからといつて、支那國民性の有する上述の如き嚴たる實體性、即ち支那國民性が支那國民事象を統一的に理解せんがためには必須の概念であるといふことには眼を蔽ふことは許されない。是に於て支那國民性そのものの全貌を精緻な姿に於て捉へんことは斷念すべきも、支那國民事象を理解する上に於て支那國民性の實體性を念頭に置くことは飽くまで必要である。

支那國民性の實體性を念頭に置いて、支那國民事象の理解には左の諸々の行き方が存する。

一 支那國民性の一斑即ち一二の法則性、取分け、特徴的なる法則性を捉へんとして、あれこれの支那國民事象、特に特徴的と見ゆる支那國民事象乃至文化、又は他國民と支那國民とに共通する事象に支那國民の現したる特徴を分析する行き方。「何々に現れたる支那國民性」、「何々を通して觀たる支那國民性」と稱へて試みられる支那國民性の把握は此の行き方をとれるものである。此の行き方をする場合、支那國民性の全貌を捉へんことを斷念して、たゞ其の一斑、即ち一二の特徴的なる法則性を捉へむことを旨とする態度と、然らずして、所謂群言古語を註する以上に

は出で得ないことを知り、望洋の感を懷きつゝも、支那國民性の全貌を捉へんことを遙かかなたに目指し、大成を子孫の代か後の世に委ねて自らは單に一つの踏石を置くことに甘んずる態度とあり得る。後の態度は群盲の一言として象を評するものであるが、象體の一部を摸して象の全貌を斷ずることを、だにせざれば、其の誹りを免るべく、而も拱手して敢へて象を摸することをせざる横着ものに優ること萬々である。

二 右に極めて近い行き方として、支那國民性そのものを捉へんことを目指さず、只管一定の支那國民事象若くは其の一定領域又は一定の文化的因素の理解を目指して、其れだけに考へられる精神作用の法則性を統一的に把握する行き方。其の精神作用の統一的法則性は之を其の支那國民事象なり支那文化因素の精神構造又は性格と考へることが出来る。個々の支那國民事象なり其の領域なり文化的因素なりは支那國民事象全體を全體とする部分に外ならないから、勿論支那國民精神構造又は支那國民性を擔つてゐる。といふよりも、更に適確には、其の精神構造は支那國民精神構造を全體構造とする部分構造である。依つて、此の行き方は支那國民精神構造の一定部分を捉へんとするものに外ならぬ。此の部分構造は例へば支那法律に就いてならば「支那法律の性格」と言ふと同時に「支那法律の國民性」と稱へることが出来る。更に又、支那法律は自明的

に支那國民性を擔つてゐるのであるから、前の場合と同様「法律に現れたる支那國民性」と呼ぶことも出来る。

三 支那國民性の根柢であり軸心である所の支那國民の世界觀、即ち全人生生活の諸領域に對する根本的な評價態度に焦點を置いて、只管之を捉へんとして、其れを擔へること最も豊かなる所の支那國民の宗教思想、廣く言つて支那思想を推究する行き方。

四 支那國民性の全貌即ち支那國民の精神作用の統一的法則性の總體のほんの骨組を捉へんとして、出事る丈廣く深く支那國民の歴史的社會的事象を見渡して分析する行き方。支那國民事象は餘りに廣袤にして多様、何人の知能をも超越するといふべく、此の行き方に依る支那國民性全貌の把握はほんの素描でしかあり得ず、而も、動もすれば群盲の一言象を摸して象の全貌を斷ずるの結果となることなきを保し難い。

五 同様に、支那國民性の全貌のほんの骨組を捉へんとして、支那國民性の——極めて不十分ながら——縮圖と考へられる支那人個人の性格を分析する行き方。支那人の典型である様な個人の性格が支那國民性の縮圖であるにしても、支那國民事象が餘りに廣袤にして多様なるため、其の縮圖として極めて不十分なる結果、四の行き方と同じく、此の行き方も亦ほんの素描に終つて

重要なるものを取り遁し、而も、動もすれば盲人象を評するの結果となる。如何に努めても精々一つの試みに竟るであらう。

六 支那國民性そのものを捉へんことを目指さず、一定の支那國民事象の理解に重きを置き、何かの支那國民事象を理解する上に支那國民性を妥當的な根據とする行き方。即ち、或る支那國民事象がしかじかであるのは恐らくしかじかの支那國民性があつて其の現れであらう、といふ様に、或る支那國民事象を支那國民性にひつけて理解する行き方。

支那國民性の實體性を念頭に置いてする支那國民事象の理解たる敘上の行き方はいづれも支那國民事象のかなたに支那國民性を垣間見る丈のものである。支那國民性を畫面の對象として眞向から之が全貌を精緻な姿に於て捉へんとするものではない。従つて、嚴正に言へば、支那國民性の學ではなくして、國民性的なる支那國民事象の學、簡稱して、國民性的支那研究である。すべて、支那國民性の實體性に就いて明確なる意識を有ち、之を念頭に於てする支那研究は、たとひ支那國民性の語を口にせずとも、國民性的支那研究である。眞個の支那國民性の學は數多の國民性的支那研究を踏石として幾世代かの後に大成せらるべき將來の學問である。

將來の學問たる支那國民性の學にせよ、現實的な國民性的支那研究にせよ、實證主義に立脚

り、實證的なることこそ科學的なる所以なりとし、支那國民の歴史的社會的事象を自然現象の如くに取扱ふ所の、いはゞ、自然科學的支那研究と異り、支那國民事象全體なり一定の支那國民事象なりを支那國民の精神作用として之を統一的に理解せんとするものである。其の方法は精神科學的である。かの自然科學的支那研究に對して精神科學的支那研究と呼ぶべきであらう。

前編 現代支那人の性格と世界観

第一章 現代支那人の性格

一 日滿支新秩序の建設と現代支那人の性格

善隣友好、共同防共、經濟提携の三原則に則る日滿支新秩序の建設は人類世界に未だ曾つて見ざる所の全く創造的な大事業である。其の意味で世界史的大事業である。第一、相隣りする強國は互に嫉視し必ず相闘ぐといふ所謂隣國心理の自然法則を超越するものである。「日支不再戰」と謂ふは正に其の意である。第二、日滿支自らが曾つて創造し又は體驗した所のものの反覆ではない。古の朝貢や單なる文化受容と異り、近時の一方的進出や反抗輕侮の關係と違ふ所の新しい日滿支關係を招來しようとするものである。第三、他民族他國家が創造し又は體驗したる所のもの模倣でもない。征服被征服關係に非ず、歐米資本主義的帝國主義の本國對植民地關係と異り、

ソウイェト聯邦の相互關係と違ひ、英帝國や南北米洲のブロックとも亦同じからざる——従つて日滿支ブロックと稱するの當らざる——勿論合邦にも非ざる日滿支關係を形成しようとするものである。かく、自然と經驗とを逸脱する所に日滿支新秩序建設の創造性があり、世界史の大事業たる所以がある。

雙方が獨立と自主とを保ち、雙方の自由意志に基づいて協働し協働の効果を擧げることが東洋的に巧妙に表現して合作といふ。日滿支新秩序は日滿支各方が獨立と自主とを保ち、日滿支各方の自由意志に基づいて協働し協働の効果を擧げる組織である。故に、日滿支新秩序を換言すれば日滿支合作の組織である。日滿支新秩序の建設は即ちかゝる日滿支合作を組織立てることに外ならぬ。其の組織立て自身も亦日滿支合作に依るものなること勿論である。

日滿支新秩序に於て日支兩國は全面的に合作しようとする。獨り經濟合作のみならず、政治合作、思想合作、文化合作、軍事合作の廣きに亘る。日滿支新秩序は其れに従つて日滿支經濟新秩序、政治新秩序、思想新秩序、文化新秩序、軍事新秩序等の諸部面となる。交婚に依る優生合作さへも考へられぬではない。

日支兩民族兩國家が雙方獨立と自主とを保ち、日支雙方の自由意志に基づき、而も民族生活國

家機能の全面に亘つて協働し協働の効果を擧げんとする日支全面合作は隣國心理の自然法則を超越すること遙かなるものであり、東亞自らの經驗にも他民族他國家の經驗にも絶えて見ざる所である。日滿支新秩序の建設が人類世界曠古の創造的的大事業たる所以實に茲に存する。

偕て、日滿支新秩序建設といふ鴻業の理念は概ね右の如く玲瓏玉の如くなりとしても、其の實現は自然的社會的諸多の制約の下に立つ。例へば、日支經濟合作に於て、日本の技術及び資本と支那の資源とを長短相補、有無相通の關係に組合せると稱しても、資源關係は日支餘りに類似してゐる。組合せは凹凸宜しく恰も割れものを合せる様にしつくりとは行かない。そこに現實の理念からの歪みは避け難い。

日滿支新秩序實現に對する制約的要素數多なる中に日支雙方の國民に考へられる精神作用の統一的法則性の總體たる國民性も亦其の重要なる一たるを失はない。一因素といふよりもむしろ全制約の一断面である。支那國民に考へられる精神作用の統一的法則性の總體たる支那國民性が日滿支新秩序建設に對する制約的要素として如何に障礙的、障礙除去的、乃至方向規定的作用を營むであらうか、現に營みつゝあるか、を見定めることは重要なる課題と思はれる。

各人には其の顔の各様なるが如く各様の性格乃至精神構造が認められる。と共に、人間としての普遍的な精神を有し、近代人ならば近代人としての一様な合理主義的な性格を有してゐる。性格の此の個別性と普遍性との中間には尙幾多の集團の個性が認められる。性、年齢、種族、職業、地位、階級、國民等各部類各集團には夫れ／＼独自の性格が其の成員たる各人に共通に認められる。就中重要なるは各國民の成員たる各人に共通に認められる各國民夫れ／＼に獨自なる個人性格である。正確にいへば、其れは國民を代表し、國民の典型である様な個人の性格である。こは國民に屬する個人に考へられる精神作用の統一的法則性の總體であつて、國民そのものに考へられる精神作用の統一的法則性の總體たる國民性とは峻別せらるべきものである。

支那人性格と支那國民性とは峻別せらるべきものであつて混同を許されない。然しながら、支那人性格は——極めて不十分ながら——支那國民性の縮圖である。其の限りに於て、支那人性格も亦日滿支新秩序建設に對する全面的なる制約的要素である。茲に於て、支那國民性に準じて、支那人性格が日滿支新秩序建設に對する制約的要素として如何に障碍的、障碍除去的、乃至方向規定的作用を營むかを見定めることも亦有意義と思はれる。而して視野を現代支那人に限定することに依つて精しきを得、よりよく目的にそひ得るであらう。

各人は夫れ／＼其の独自の根本的なものの感じ方、考へ方、言ひ換へれば、全人生生活に對する根本的な評價態度、要するに、世界觀といふものを有つてゐる。現代の主たつた諸國民の個人は所謂近代人として略ぼ普遍的な合理主義的世界觀の上に立つてゐる様に見えるけれども、立入つて觀るならば、其の國家生活の原理として、或は民主主義で行かうとしてゐるものあり、或は全體主義で行かうとしてゐるものあり、更に或は共產主義で行かうとしてゐるものもあることでも解る様に、夫れ／＼異つた世界觀を懷いてゐる。取殘された諸民族の個々人の有てる夫れ夫れの世界觀の獨自性は遂かに明確である。我が日本國民は近代民族の雄であるが、日本人は明確な獨自の世界觀を有つてゐる。日本人世界觀の獨自性は極めて顯著なものである。上は崇高なる國民信仰たる國體から下は日常生活の習俗に至るまで全生活を獨自の世界觀を以て貫いてゐる。現代支那人も亦日本人に劣らぬ明確な獨自の世界觀を有つてゐる。日支兩國人何れも單なる近代人といふ平盤の中に没し切れないものを有つてゐる。日本人は獨伊兩國人と共に全體主義を奉ずるとか、現代支那人は斯々等と單純には片づけ得ないものがある。

各人独自の根本的なものの感じ方、考へ方、即ち世界觀といふものは決して固定不變なものではないが、一定の時、一定の場合に於ては其の個人の全生活の根柢であり、思想行動のアプリオ

りであつて、合理的思惟も其の世界觀の埒内で行はれ、合理的思惟で以て自らの世界觀そのものを處理するといふことは出來ないものである。世界觀は其の意味に於て非合理的な、神祕的なものである。理窟ではどうにも出來ないもの、むしろ理窟を引摺つて行くもの、それが世界觀である。

全生活を引摺る所の此の世界觀なるものは其の個人の性格又は精神構造の根柢であり、軸心である。個人性格に於て彼の世界觀が其の根柢をなせば、國民性に於ても亦其の國民の世界觀が其の國民性の根柢をなす。支那國民の世界觀が支那國民性の根柢である。而して、支那人性格が支那國民性の縮圖である限りに於て、支那國民の世界觀は支那國民の典型である様な支那人の世界觀にそのまま讀み取ることが出来る。

とにかく、世界觀なるものがかくの如く根柢的なものであり、理念に引摺られるどころか却つて理念を引摺る頑固さを有することを惟ふ時、殊更其の有つてゐる世界觀の獨特な現代支那人の場合、如何に現實が理念からの歪み避け難く、日滿支新秩序建設といふ日本人に發する所の理念が如何に堅い制約を現代支那人性格から受けなければならないか思ひ半ばに過ぎるものがある。

典型的なる現代支那人は如何なる世界觀を懷き、如何なる性格を有つてゐるか。これは實に厲

大且困難な問題である。第一、其の全貌を示さうとするならば、生命的、經濟的、宗教的、理論的、美的、社會的、政治的一切の生活方向を限なく見渡し、更に全體の構造形式を捉へなければならぬ。第二、典型的なる現代支那人の性格を捉へむとするに、人口四億の支那には四億の個別的な性格が存することを認めなければならないし、支那人も人間として其の精神構造の基底に普遍人間性を有し、遅れ馳せながら矢張近代人として稍々近代人並みの合理主義的な性格を有してゐることも見通してはならないし、同じく現代支那人といつても、男女の性に依り、老壯幼の年齢に依り、地域に依り、種族に依り、農工商賈の職業に依り、軍官民其の他の地位に依り、有産無産及び賢能衆庶の階級に依り、著しき性格差の嚴存することに眼を蔽うてはならない。典型的現代支那人の性格を如實に描き出さんことは容易ならぬ業である。茲にはたゞ日支合作に焦點を置いて觀て日滿支新秩序建設に對して制約作用を營むと考へられる現代支那人性格の一斑、いはば、日滿支新秩序建設に對する現代支那人性格の接面を照らすに止め、現代支那人性格の全貌を描き出すが如き企ては他に譲り度いと思ふ。従つて、現代支那人の全性格乃至全精神構造の中、かうした民族的生活に直接與るべき精神作用方向並に其の根柢たる世界觀の一面を剔抉し、若干之が展開を跡づけるに止めようと思ふ。

勿論、其れは現代支那人の大多数に共通する其れではなく、任意の實在的個人の其れでもなくして、支那國民を代表する典型的現代支那人の其れでなければならぬが、典型的現代支那人を見定めることは至難の業に屬するが故に、たゞ典型的ならんことを狙つて之を無限に追求するの外はないであらう。

二 現代支那人の性格

單刀直入に言つて了へば、典型的現代支那人の精神は群的保身の散文構造を有してゐる。構造形式散文的であり、群的保身を根幹的内容としてゐる。

支那人生活の根本形式は散文的である。支那人は人生世界を全體にまで統一づけようと努めない。人生世界の部分々々を結びつけて行つて全體の統一にまで及ぼうともしないし、又、人生世界に無上至高のものを定め之に向つて部分々々を秩序立て全體を其の無上至高なるものの下に統一しようともしない。支那人の自我は是非之だけは離されぬといふものを有たず、部分々々の世界と生活とを無秩序に飄々乎として渡り歩き、たゞひととき或る部分に住する間は完全に之に没入する。部分々々が其の時其の場合の全體であり、無上至高である。であるから、支那人世界は

漠々と盛り上つてゐるけれども、而して部分々々は妙なる音色を發してゐるけれども、全體にたゞよふところの韻律が聞かれない。「散文的」と比喩的表現をなす所以である。支那人生活根本形式の此の散文性から尊大、虛無、無自信と過大な自信、無感動と激情、安分、合理、矛盾、樂天等の諸性が出て來てゐる。

支那人は人生世界に無上至高なものを認めて之に敬事するのでもなければ、之こそはとしがみつゝくものも有たず、常住するものは飄々乎たる彼の自我のみ。であるから、彼の生活に於て彼の自我が常に亨々として聳え、尊大底知れぬものがある。支那人は他人に踏みつけにされるのが大嫌ひである。といふよりもむしろ、踏みつけにしようとしても飄々乎として逃廻つて捕へることが出來ない。何ものかに彼がしがみつけば其のものを押へさへすれば容易に彼を捕へ得るであらう。例へば、支那人が富を至上と仰ぐか富だけは離されぬとしがみつけば、富力に於て彼に優るか又は富を左右出來れば彼の尊大を挫き得るであらう。然し、彼は「財富何するものぞ」と容易に逃出すのであるから手に了へない。支那人の尊大はかゝる尊大であるから、何か一定の事に就いて得意になり又は威張るといふのではない。内容的に或る事に就いて得意になるのではなくて、無内容に、空虚に尊大である。是非之だけはといふ何ものをも有たないのであるから、何か

の事で紛ふかたなき劣位に立つことになつても、自らの劣位を正直に認めながら、飄然と逃出して丁つて、決して「如何にも参りました敵ひませぬ」とお辭儀をしない。其の事でやつづけられても何か他の事に遁れて涼しい顔をしてゐる。眞底からへこすざれるといふことがない。優者に對してお辭儀をし服従することありとすれば、其の服従は一時の「擬服」か「利服」であつて内心は恬然たるものである。然しながら、有り合せの事で何がしか威張るに足る丈の事があれば其の事に就て大いに威張る。優者に對しては右の態度で空虚に尊大であるが、劣者に對しては彼が優者である所の事柄に就いて内容的に威張る。其の場合にも彼の自我が奔放に振舞つて實際の優越地位以上に威張り、劣者を踏みつけにする。少しでも威張れることがあれば大いに威張る。結局内容が伴はなくなつて、對優者の場合と同様に空虚な尊大に趨つて了ふ。かゝる空虚な尊大が世人のいふ支那人の虚榮ともなり、「面子」尊重ともなり、劣弱者に對する冷酷ともなるが、時に又支那人獨特のユウモアを醸し出す。

支那人は是非之だけはといふものを何も有たず、何ものをも徹底的には愛しないのであるから、眞底は虚無的である。何ものにも眞の歡喜を覺えず、何事にも悲哀のどん底に落されることがない。どんな目に遭つてもへこ垂れるといふことがない。何でも結構であると共に何でも充分

ではない。支那人の人生世界にはどこにも極樂も地獄もない。有頂天もなければイントレランスもない。すべてに諦めがよく、死の恐怖さへ軽いものである。「没法子」といふ呪文によつて一切の苦難がかき消される。此の虚無性と諦めには一種の覺者の風格がある。「どうにも仕方がなければどうにでもなれ」といふ度胸が出来てゐるとも見える。

支那人は是非之だけはといふものを何も有たず、何ものをも徹底的には愛しないのであるから、假に或るものに就き力を有つてゐてもそれに就いて眞に自信を有つことが出来ない。吾々が或る事に就いて自信を有つのは其の事を大算なことと信じ、其の事に就いて吾々が何がしかの力を有つてゐる場合であることを省みて解るであらう。自信力がないから心にもないことを言はねばならず附和雷同もしなければならぬ。自分自身では自信力をよう有たないくせに、否、自分丈では自信を生み出し得ないが故に、他から與へられてはじめて自信力を有ち、上述の如き空虚な尊大に趨る傾向から、一旦他から自信力を與へられる様なことがあると、實際自己の力の程を知りながら、動もすれば客觀的な力の程を離れて極端に自信力を増大し、一見英雄的にも振舞ふ。支那人は時に一廉の英雄となる。

支那人は是非之だけはといふものを何も有たず、何ものをも徹底的には愛せず、又、部分を全

體にまで統一づけようとしないのであるから、感動的にはなり得ない。吾々が或る部分的な事にも感動を有つのは其の事を愛し、其の事を全體に結びつけて見て其の事の意義の大きさを認めるからではないか。無感動が無關心ともなり、また時に冷酷の感を觀る者に興へる。

無自信である上に無感動であるから、今の支那人には創造力（精神的生産力——眞の自由）の鬱勃たるものがなく、「英雄的狂酔」の要素が認められない。自信力と感動性とが蓋し創造的精神の推進力であり、英雄心理不可缺の要素である。

支那人は無感動であるけれども、自我を亭々として聳やかし空虛に尊大であつて他人に踏みつけにされることの大嫌ひなところから、或る事を愛する上では無感動であり、人と和し結ぶことには無感動であるけれども、自我を踏みつけにする他人を憎み、其の憎むや極めて感動的であつて、容易に激情に趨る。而も部分に住するや完全に之に没入するから一時的には憎悪に熱中する。憎悪の對象が必ずしも最も憎悪すべき對象でなくても、支那人は時に全靈を擧げて徹底的に之を憎悪する。憎悪に熱中するや何を仕出かすかわからない。そこにヒステリー即ち「價値錯倒」の症状を呈し、残忍性を現はす。

支那人は部分々々に住する間は完全に之に没入し、其の部分が全體の中に有つ意義を考へわづ

らふことをせず、至つて諦めがよいから、一面無感動であると共に、他面其の分に安んじ不平不満を懷かない。貧に在つては「貧樂」の心境を持ち、預料的に思ひ煩はず、取越苦勞をせず、創造力を缺く代りに忍耐強い。だから、分業協業に於て持場を克く守り、部署に就いて極めて溫良忠實である。勿論創造的精神を發動せしめることがない。部分に安住せしめ得ざれば支那人はこよなき勞務者である。十年一日の如く勤務することは支那人には何でもないことである。此の安分性とかの尊大性虛無性並に無感動とが支那人の宿命觀の基礎をなし、又彼の怒揚迫らざる大陸性として吾々の眼に映する。

支那人は部分世界部分生活に住する間は完全に之に没入するから、全智能をそこに傾倒することが出来、其の部分に就いては極めて合理的な思惟をなし判断をなし、打算に長けてゐる。其の部分世界の限界内では水も濡らさぬ合理的な組織立てをなす。聰明とは正しく彼のことである。通電や聲明の堂々たるを見ても解る様に、自己主張の議論をなすや其の構想も運びも日本人等のものに較べて水際立つて鮮かなものである。策謀計略を樹てるや裏に裏ある素晴しき組立てをなし而も運用を過たぬ。と共に、相手の謀略を讀取るに些かも落度がない。何段構への謀略を以てしても支那人を瞞すことは容易ではない。瞞された風に見えては瞞されてゐない。惘喝、ゼス

チヌアが如何に迫眞力を以て巧みになされても、眞意や實情は容易に其の看破する所となる。わげなく相手の足下を見すかす。發動すべき實力が伴はなければ支那人を眞に動かすことは出来ない。かくの如き鋭い合理性とかの無感動性とかを結びつけて支那人を無感動合理主義 (Eicherner Rationalismus) の人間であるといふことも出来る。

然るに、此の看破力が鋭きに過ぎて、相手に何等策謀計略なく、たゞ愛情か相依の心か衷心提携の希望が動いてゐる場合にも亦支那人は相手の心に謀略を読み取る。聰明に過ぎて聲なきに聞き、疑心暗鬼を見るのである。人彼に施すや必ず求むる所ありと信じ、卒爾として施せば何を代償に求むるものなりやを思ひ煩ひ、或は相手に何かわれに施して以て蔽ふべき弱點あるに非すやと觀る。支那人の猜疑心と謂はれるものが之であつて、支那人をして眞の愛情を愛情として受取らせ、誠意を誠意として理解せしめることは容易の業ではない。誠意は斷じて偽であつてはならず又必ず現前せられなければならない。

支那人が鋭い合理性を發揮するのは、當面彼が任する部分に完全に没入してするのであつて、全體的見地や無上至高のものに照してするのでなく、部分々々を其の時其の場合の全體とし無上至高としてするのであるから、其の部分世界の限界内でこそ水も漏らさぬ合理的な組織立てをし

ても、全體的見地からは必ずしも合理的ではあり得ない。往々にして、部分的に鋭く合理的である丈に、全體的には却つていみじき非合理に墮する。目先得べき所が失ふべき所より大であつても、究局失ふべき所が遙かに大である様な結果を招來する。木片で集めて丸木で流す様なことになる。これ合理性の行き過ぎによる非合理性に外ならぬ。

支那人は憎惡の激情に趨つて感情的にヒステリー症状を呈するのみならず、かの虚無性と此の合理性の行き過ぎによる非合理性とを以て到る處知的にもヒステリー症状を現出する。些事の爲に面當てに自殺するあの捨鉢的心理である。「どうにでもなれ」といふ自棄的心理である。やぶれかぶれである。一つの目的の遂行の爲に他のあらゆるものを手段とし又は無にして了ふ態度である。夫あり子ある婦女の身でありながら、家庭を他處に父の仇孫傳芳の後をつけ狙つて遂に彼を暗殺し、從容縛に就いた某夫人の態度である。「汝と偕に亡びん」と叫んで敵と差しちがへる勇氣ともなるが、「鳩を飲んで渴を止める」愚の骨頂ともなる。「砒霜を吃つて老虎を死す」即ち、虎は吾が生命を脅やかす、惡むべし、吾毒を喰つて生命を自ら殞し、虎をして吾が死屍を喰はしめ、以て惡むべき虎を殮さむ、といふに至つては正に此の非合理性の極致である。かうして、支那人は容易に其の鋭い合理性を抛擲し其の合理的な打算を超越して、「價值錯倒」に陥る。

部分々々を其の時其の場合の全體とし、無上至高として、其の部分に固く眼界を限り、部分々々に水も瀾らさぬ合理的な組織立てをするのであるから、部分組織相互の間に矛盾相剋が起らざるを得ぬ。例へば、「發財」を考へて「面子」を其の手段とし又はこれを全く無にしたかを見れば、直ちに「面子」を上位に据ゑて「發財」を其の手段とし又はこれを全く無にするのであるから、「發財」と「面子」との間矛盾相剋の絶えることがない。

又、無内容に尊大で、何でも結構であると共に何でも充分でなく、可ならざるなく不可ならざるなしであり、自信力がないから心にもないことを言はねばならず、せねばならず、自信力なくせに他から自信力を興へられると極端に自信力を増大し、無感動合理主義者かと思えてヒステリー症状を起し、時に憎惡に熱中し、合理性を抛擲し、容易に合理的打算を超越するのだから、支那人の人生世界全體は矛盾だらけとならざるを得ぬ。

然るに、支那人は此の矛盾だらけの人生世界に生きながら矛盾の悩みといふものを覺えない。統一なく韻律なくたゞ漠々と盛り上つてゐる彼自身の世界に統一と韻律とを押しつけようとの苦惱を知らぬ。部分々々に妙なる、然し得手勝手な景色を發せしめて怡しさを以てしてゐる。「發財」と「面子」との矛盾、公人生活と私人生活との矛盾、言行の不一致等々は支那人に取つて悲劇の

種とはならない。彼は恬として矛盾を矛盾のまゝに放任する。矛盾に堪へる力、不明朝を忍ぶ力を有つてゐるとも言へよう。空虚な尊大が支那人獨特のユウモアを醸し出してゐるが、それ丈でなく、矛盾だらけで而も矛盾の悩みなき彼の生活は全面的にユウモリストの生活である。如何なる矛盾にも洒蛙々々としてゐるところは人を喰つた圖太さであるが、何事にも悲哀のどん底に落されることなく、又矛盾に恬然たる支那人は世にも仕合せな喜劇的人物である。羨むべき樂天家である。

支那人生活の根幹的内容は群的保身である。支那人も文化的人間として生命的、經濟的、理論的、美的、宗教的、社會的、政治的一切の方向に生活を盛り上げてゐるのであるが、精神の構造形式上述の如く散文的にして、無上至高のものを有たず、何でも結構であると共に何でも充分ではない。むしろ、一切が夫れど、無上至高であり、且一切が無價値である。然しながら、一切のものが平等に無上至高且無價値であるのではない。其の間自ら厚薄上下の別がある。就中、厚く上なるものは群的保身である。散文的なるまゝに支那人は最も群的保身を追求する。支那人の生活は群的保身を基軸として韻律なく回轉してゐる。

支那人が最も追求する所のものは群的保身である。群に於てする安居樂業である。安居樂業を

群に於てするのであつて、安居樂業の爲に群するのではない。群居と經濟と生命維持との渾然たる複合である。

支那人にとっては死の恐怖さへ軽いものであり、生命も時に彼は鱗履の如くに扱ひ、身體的缺乏や苦痛に克く耐へるけれども、最も生命を惜しみ、生命的生活を愛することに變りはない。生命と共に經濟も亦彼の最も重んずる所である。經濟を重んずること生命以上かたさへ見えることあり、かの打算に長けてゐることが之に結びついて、支那人は何は措いても「經濟人」ではあるまいかとの印象を観る者に與へる。

然しながら、支那人の最も重んずるのは生命と經濟と丈ではない。社會を悦び人間關係を悦ぶこと無上である。むしろ生命・經濟にもまして人間關係を愛する。死すとも「相共に」「食へなくとも」「相共に」といふのが彼の念願である。こゝにも彼の「貧樂」の境地が存する。支那人は「生命人」や「經濟人」でなくもないが、それより高い程度に「社會人」であり、人間主義者である。自ら社交性に富み社會技術に長け、一廉の社會技術家である。畢竟、支那人生活の根幹的内容は生命經濟社會生活である。彼は生命的經濟的社會人といふ複合人であるといへよう。經濟人としての面は商人としての支那人にいやといふ程よく現れて居り、生命人社會人としての面は龐大な

る人口と旺盛なる出産率に手に取る様に現れてゐる。神の言葉もなく爲政者の命令もないのに、支那人は撓まず産んで殖えて地に充ちてゐるではないか。

たゞし、支那人は其の無自信と精神的生産力——眞の自由——や英雄的狂醉の要素の缺如から、自然に對して未だ概ね自然歸向に傾きヨーロッパ啓蒙運動後の自然昂揚又は棄却の態度には後れてゐるので、支那人の生命生活旺んなりと雖も尙植物的であり消極的である。經濟生活も亦同様にして、旺んなりと雖も尙自然昂揚棄却の大産業よりも産業革命前の經濟乃至小規模經濟に傾いてゐる。たゞ彼は其の長ずる社會技術を經濟に現して貨幣經濟の相當なる發達を見せてゐる。故に支那人の生命經濟生活は「保身」といひ「安居樂業」といふに當る。次に、支那人の社會生活旺んなりと雖も、之亦自然歸向に禍ひされて自然人のみを社會關係に立入るべき人格的實在であるとする考へに傾き、團體の人格性を信じ兼ねる。其の悦ぶ社會は低級な共同社會即ち地緣血緣其の他因緣傳統に基づく自然的社會か精々徒黨である。單に寄り合ひ觸れ合ひ談し合ひつきあふことに彼は悦びを見出すのである。自然歸向に無自信が手傳つて、支那人は孤獨を最も厭ひ、同類群することを無性に悦び、附和雷同し、群すれば急に勇氣を出す。利益社會關係にも亦力めてつきあひの悦びを見出さうとする。故に、支那人の悦ぶ社會は群であり、其の社會生活は群居

といふに當る。彼の長ずる社會技術はむしろ群居技術である。依つて、支那人生活の根幹的内容はより適切には群的保身、群に於てする安居樂業といふべきである。

支那人は「社會人」としてこよなく社會生活を愛し群居を悦ぶのであるが、自我を亭々として聳やかす空虚な尊大性は飽くまで強く、どんな優者にもへこまざれることがない様に、群の中に自我を没するといふことは斷じてない。彼に没我といふ境地は存しない。如何に献身的に家に盡し公に奉ずるといふ場合にも我臭は抜け切らない。彼の奉公は如何に献身的な場合でも滅私奉公ではない。社會の中に自分が入り込むのではなく、自分の中に社會を取り込むのである。或る没我的な社會的態度を他人事や公事を「我が事の様に喜ぶ」といふが、支那人は他人事や公事を「我が事にして喜ぶ」のである。社會の實在に關して彼は飽くまで名目主義者である。此の點からしても支那人は自然人のみを社會關係に立入るべき人格的實在であるとする考へに傾かざるを得ず、團體の人格性を容易に信ずることが出來ない。又、支那の社會全體が高度に利益社會化して見えるのは當然である。利益社會化してゐる限りで支那人の社會技術は只管契約技術である。

支那人は社會生活を愛し人間關係を悦ぶのであるが、自我を亭々として聳やかし没我を肯じないのであるから、相互關係に於て相手方から彼に對して彼の人格が認められ、彼が其れに値ひす

かどうかの合理性はともかくとして、相應の地位が與へられ、踏みつけにされることなく、或る程度の自由が與へられ、其の自由領域に就いて信認せられ、事を委されなければならぬ。彼からして相手方は信頼出來信認の置ける相手方でなければならぬ。結局「面子」の重ぜられ、相互信認關係の保たれ、信義の行はれる人間關係が彼の悦ぶ所である。相互信認關係と信義の履行とは一體不可分であるから、彼の悦ぶ所に信義なりとするも不可はない。同族同郷相集る所以は自然歸向にも基づくが、其れと同時に、信認關係が保たれ易いにも依る。

世に、支那人は保身を事とし打算に長し喰はずに利を以てすれば則ち跟いて來る、何等地位を認めず、少しの自由をも與へず事を委さなくとも、彼を信認せず彼から信認を置かれる様に努めなくとも、財利を供與しさへすれば支那人を惹きつけて行ける、といふのが一派の定論となつてゐる様である。これ程由々しき謬見はない。成程、支那人は一面經濟人であるから其の保身の方向に投じて財利を供することを要する。けれども財利を供する丈では決して長くは惹きつけて行けない。併せて、彼の人格を認め、相應の地位を與へ、或る程度の自由を與へ、其の自由領域に就いて彼を信認し、事を委せ、彼の信認を博するな舉措をしなければならぬ。彼の「面子」を重んじ、待つに信義を以てしなければならない。むしろ「面子」を重んじ、待つに信義を以てす

れば財利を供しなくとも長く惹きつけて行ける。勿論、相當の待遇をするといふ意味で財利を供することが即ち「面子」を重んずる所以であることが多い。

従つて、信認關係の保たるべき基地を有する同族同郷關係でなしには如何なる人が支那人を惹きつけることが出来、彼と合作することが出来るかといふと、先づ第一に、彼に對して優位に立つ力の人でなければならぬ。劣者弱者であれば支那人は其の尊大性を以て之を踏みつはにしてしむ。だから、第一に力の人でなければならぬが、單に力の人といふ丈では支那人を長く惹きつけることは出来ない。力の人であり且信義の人でなければならぬ。即ち、智力にせよ、武力權勢にせよ、財力にせよ、生命力にせよ、先づ力を有つてゐて、而も支那人の人格を認め、彼を相手にし、彼に相應の地位を與へ、自主獨立に動ける領域を與へ、其の自由領域に就いては彼を信認して事を任せ、自らは然諾を重んじて約束を守り、言行一致、行ふと言つたことは是が非でも行ひ、行ひ得ざることを言はず、欲せざることを言はず行はず、恫喝せずゴスチニアに趨らず、右手ですることを左手で毀す様なことをせず、常に合理的、計畫的に擧措進退する「性格的」な人、「腹」の出来た人物、要するに、支那人の「面子」を重んじ自ら信義を守る、別に言へば彼を信認し且彼の信認を裏切らざる人でなければならぬ。歸するところは力と信義とである。

支那人をして眞の愛情——求めざるの愛——を受取らすことは容易ではないのであるから、力と信義とを以て臨めば足り、愛情の押つけは不要である。徒らに憐み恵み施すことは何等支那人を惹きつける所以ではない。却つて何を對價に求むるかを思ひ煩はしめ、又はわれに何か弱點あるにあらずやを揣摩せしめるのみである。強大なる武力權勢財力並に智力を有てる者は、堅く信義だに行へば、即ち彼の人格を踏みつげず奴隸にしようと思はなければ、如何にかゝる諸力を以て存分に振舞つても、支那人を引摺つて行けるであらう。即ち、支配體制や指導秩序や統制組織協業組織の中に彼を据ゑて、些かなる財利を供し狭小なる自由領域乃至「面子」を與へる丈で以て、克く彼をして其の固有の安分性に長く安住せしめ得、溫良忠實なる被支配者被指導者、勞務者協力者たらしめ得るであらう。われを「盟主」とも「民族英雄」とも仰がしめることが出来る。此の場合「面子」は力と信義との前に極小限に讓歩するのである。かうして、武力權力智力（謀略）を振ふ者は支那人の「擬服」や「利服」や屈服以上に順服心服を克ち得、支那に成立困難と信ぜられる獨裁組織を形成すること決して不可能ではない。又、財力を振ふ者が支那人をして溫良忠實なる使用人勞働者たらしめ得る根據も亦茲に存する。現實に於て、支那民族の上に大なれ小なれ獨裁的地位を築くに成功してゐる支那人を観るに、必ずや彼は武力權勢財力智力を

有つて而も支那人衆に信義を以て臨んだ人々である。日本人又は第三國人にしてなにがしかの程度に支那人を惹きつけてゐる者をよく／＼觀れば、なまじ情の人や愛を授け恵み施す人ではなくして、必ずや生殺與奪苟くも食言せざる底の力と信義の人格者であるではあるまいか。

支那人を惹きつけるには先づ力の人でなければならぬ。劣者弱者であれば支那人は其の尊大性を以て之を踏みつけて了ふ。其れが信義の人でもなかつたら、支那人は之を無視する態度又は嫌惡する態度で踏みつけにするであらう。若し、力の人でなく信義だけの人であつたら、支那人は之を踏みつけにし忠犬の如く之を重寶がり之を利用するであらう。何れにしても蔑視し踏みつけにする。恫喝ゼスチアを如何に逞しうするもわけなく足下を見すかしてしまふ。力だけの人でも亦支那人を長く惹きつけることは出來ない。力を振ふ丈で信義なく、支那人の人格を認めず、彼を相手にしてやらず、寸毫も自由領域を興へようとせず、彼を信認して專に委せようとはせず、自らも然諾を重んぜず約束を守らず、言行不一致、輕々しく食言し、心にもなきことを言つたり行つたり、恫喝ゼスチアを揮まくにし、右手ですることを左手で毀し、合理的計畫的に舉措進退せざる、凡そ「性格的」でない、「腹」の出來てゐない横暴な人、要するに、支那人の「面子」を蹂躪し自らは信義を守らざる、力丈の人、かくる人には支那人は決して跟いて來ない。如

何に武力權勢財力を振り廻し謀略に抜かりなくとも、必ずや支那人は飄々乎として逃廻り、決して眞底からへこまず、假にお辭儀をしても一時の「懾服」か「利服」をなすに止る。旁々相手の胸中に利己のみを讀んで猜疑を逞しうする。さもなければ、此の人に對する憎惡に熱中し、ヒスナリ一症状を現出して捨鉢となり、やぶれかぶれとなる。

偕て、團體が支那人を相手とする場合は如何であらうか。大は民族乃至國家より小は一商社に至るまで一切の社會團體に對して支那人はすべて其れは個人の寄り合ひであると考へ、人格性をこれに認めようとしぬ。支那人自らの最も悦ぶ共同社會たる家族に對してさへも亦然りであるから、團體といふものは常に内部的な對立分裂相剋を藏し、從つて「性格的」なり得ず、信義を行ひ得ないものと頭から見做して、團體に對するや常に其の團體に於て實力を握り實權を振ふものが何人であり如何なる人物であるかを洞察するに力め、漠然と團體の名に於てなされる意志表示を尊重することを躊躇し、意志表示の當務者如何を問題とし、不斷に其の團體の有力者個人の意嚮を探る。かくの如くにして、凡そ團體は支那人を惹きつけて行けない。勿論、團體は假に性格的であつても完全に利己的のみに動くものと認める。依つて、團體にして若し支那人を惹きつけ行かんとならば、力と共によほどの高い「性格性」を有たなければならぬ。民族

乃至國家であれば、第一に支那民族支那國家に對して優位に立つ方の民族乃至國家でなければならず、其の上に極度に高い信義の民族乃至國家でなければならぬ。即ち、人口、文化、國實、軍備、かゝる力を有つてゐて、而も支那人の人格を認め、支那民族支那國家の自主性を認め、支那人と支那民族支那國家を相手にし、支那人にも支那民族支那國家にも自主獨立に動ける領域を與へ、其の自由領域に就いては信認して事を委せ、自らは堅く公約を守り、聲明したことは斷行し、斷行し得ざることは聲明せず、欲せざることを聲明せず實行せず、恫喝せずゼスチニアに趨らず、一機關又は一代表と他機關又は他代表との言行が完全に合致し、常に合理的に計畫的に舉措進退すること、恰も「性格的」なる巨人の如く、高度に性格的な民族乃至國家でなければならぬ。立入つて觀れば何がしかの内部的相剋があるに違ひなからうが、遠望すればヒットラア總統一人の舉措進退かとさへ見える最近ドイツ民族國家の行動は正しくこゝにいふ高度に「性格的」な民族を彷彿せしめるものである。

徒らに支那人に恩を被せようとするのが無意味であり、強大なる力を有ち極度に高い信義の團體でさへあれば、其の強大なる力を以て存分に振舞ひ、一定秩序の中に彼を配し、些かなる財利を供し狭小なる自由領域乃至「面子」を與へるまで、克く彼をして其の固有の安分性に安

住せしめ得ること、團體が支那人を相手とする場合も個人が支那人に對する場合と同様である。支那人を相手とする團體が劣者弱者であれば、信義なきにせよ高度の信義あるにせよ、何れにしても支那人がこれを蔑視し踏みつけにし又は重責がるに過ぎないこと、強大なる力を有つてゐて之を振ふまで支那人の「面子」を蹂躪し自ら信義を守らざる、非「性格的」團體に對して、支那人が飄々乎として逃廻り、決して眞底からへこまず、假にお辭儀をしても一時の「擬服」か「利服」に止り、ともすれば此の團體（の支配的地位にある個人又は部類）に對する憎惡に熱中し、猜疑を逞しうし、時にヒステリー即ち「價値錯倒」症狀を現出して自暴自棄的となり、手のつけられなくなることも亦、對個人の場合と同様である。

以上考察しただけの現代支那人性格の一斑から吾々の歸結し得ることは、第一に、支那人々々々々稱して地球上何か特別の人群の様なことをいふけれども、支那人とても文化の人間として一般人と大して變つてゐないことである。殊に、吾々日本人が團體に對する信仰に生き、自信力を有し、感動的にして精神的生産力を有し、英雄の狂醉の要素を帶び、安分性を缺き、氣短かではあるが、ヒステリーを起さず、ヒューマンな感情を懷いて殘忍ならず、矛盾甚しからざるも矛盾

の悩みを知らざるに非ざると較べて、かなりの相違があるけれども、全般的にどことなく日本人と似通つてゐる。上述せし所にて日本人に就いても亦思ひ當る節が多々あるであらう。支那人が力と信義との人と團體とに跟着て行くことを高調したのであるが、力と信義との人に惹かれるのは普遍人間的な傾向ではあるまいか。たゞ、支那人にあつて格別此の傾向の顯著なことは認めなければならぬ。

第二に、一面に於て支那人は相手にして至つてむづかしい人間である、一筋縄では手に了へない人物である。到底太刀打ち敵はぬといふ印象が残り、他面に於て「禪味」ともいふべき持味があり、刹那々に感興を有ち、煽てれば煽てることも容易なところ小兒の如くでもあり、語めよく分に安んずるところ老人の如くでもあり、而もユウモリストで樂天的なところにいひしれぬ魅力がある。當方の遣り方によつてはつきあつて誠に好ましい人間である。

支那人は其の社會的生活方向に於て地緣血緣其の他因緣的共同社會を悦び凡そ同類群することを悦ぶ。そこに彼は多分に民族的結合の素地を有する。支那人が此の素地の上に營む民族的生活は最近に於て著しい變革を示し、受動的な自然的民族を出づること僅かなる境地から急速に能動

的なる近代民族の列に進入し來つた。支那人世界觀は決して固定不變のものではなく、歴史的に變革を閱し、最近に於ても變革しつゝあるが、其の變革の軸心は一に此の民族的生活の發展である。

即ち、支那人は血統と文化と歴史的運命と、要するに傳統を大凡一にするところの人群の間に於て自足的生活共同の意識と共依の感情を懷いて、自然的受動的民族生活を營む以上に、古來彼の空虛な尊大性を以て「天下思想」なる對外的統一の空疎なる要求と「禮教」を内容とする「中華」の文化的優越を持し來り、西力東漸に依つて「天下思想」が客觀性を失ひ「中華」の文化的優越が其の内容を失ふや、一に單なる「中國」意識に——ふた言目には「我是中國人」と言つて——無内容な優越を持して僅かに近代民族の意志性能動性を示してゐた。人動もすれば支那人に民族意識の見るべきものなしといふが、大なる謬りである。何か支那側が外國に對して優位に立つ様な事があると、其れが彼自身に極めて縁遠い事であつても、彼は無性に歡ぶ。例へば、支那人自らが尊重する傳統に屬する支那の文物とか孔子の廟岳飛の廟を外國人が讚仰し禮拜することあれば、自己民族の傳統に對する矜持に昂ぶり、誇らかに胸を張る。又例へば、外支人間の競技に於いて支那側が優勝することがあれば支那人の歡喜は大變なものである。興業目的の爲に八百長が行はれ、審判に手心があつても、さうして其の事を知りながらも、支那人は支那側の優勝を

歡ぶ。對外戦争の場合にも亦同様である。かうした仕方では支那人の民族意識には積極性はないが既に根強いものがあつた。

然るに、もとく支那人は飽くまで尊大であつて、近代民族不可缺の要素たる自主獨立の要求を深く藏する。そこへ、東漸せる西力が科學と技術とを齎したので其れを受容してやをら自然歸向から起上ると共に稍々自信力を増大し來つた。搗てて加へて、外國人の援助、日本の自己解放の前例、第一次世界大戦に於て支那がなした歐洲出兵、大戦後に於て澎湃として起つた民族自決主義、反帝國主義、植民地解放の思潮が支那人に絶大なる自信を賦與したので、支那人は極端に自信を増大し、偶々智力の優者孫文の指導を仰ぐことに依つて、遂に内部的統一、近代的國家組織、其の國家の對外的自主獨立、經濟力増大等の要求を強く持し、これ等要求を内容とする民族主義に熱し民族運動に燃える様になつた。即ち、近代民族的意志性能動性を廣汎に互つて具有するに至つた。後から尊孔運動や新生活運動に文化的優越の追求乃至反省を伴ふに及んで、全面的に近代民族生活の域に到達した。孫文の後を承けて武力權勢財力並に智力——謀略——に富み而も信義を以て族人に臨んだ（少くともさう見えた）蔣介石と其の一統とは此の機に於てかゝる諸力を以て存分に振舞ひつゝ支那民族の組織立てに邁進し、族人を率ゐて概ね溫良忠實なる被支配

者勞務者たらしめ、以て獨裁組織形成に向つた。良かれ悪しかれ、此の指導力に依つて支那人の近代民族的要求は實現の緒に就き、彼は組織ある近代民族に於て高級な共同社會生活を營まんとする方向に向つてゐた。ともあれ、支那人の民族意識は其の尊大性と共に滅却せんとしても滅却出来ない心組織の核をなしてゐる。

たゞ、自然歸向から起上り自信力を増大し來つたといつても支那人は未だ自信たゞぶりとなり自然昂揚棄却の態度に轉じたわけではなく、其の自信も他から興へられたものであり、實力を伴はぬ過大なものであり、従つて精神的生産力が内生して躍動してゐるわけではないのであるから、支那人の近代民族への進入はなにがなし、激情的ではあつても英雄的感動を伴つてゐない。果せる哉、彼の民族運動はいづれかといへば民族内部組織の建設に向ふよりも對外反撥に向つた。そこに對日衝突した一つの動機が存する。もつと重大なことは、支那人は其の飽くなき尊大性、名自主主義的社會觀に基づき、如何に民族主義に熱し民族運動に燃えるとも、民族の中に自我を没するといふことはない。依つて、内部的統一、近代的國家組織、對外的自主獨立、經濟的勢力増大全てを利益的結合の發展として理解し實行しようとする。即ち、高級な共同社會に向つてなされるべき民族の組織立てを巧緻な利益社會に向けて引擲らうとする。民族運動の指導者を「民族英雄」

と稱へつゝも、自己の勢力意欲に依つて動けるものと理解し、かゝるものとして指導者に對應する。かゝる支那人民族運動の利益社會性から、かの文化的優越の追求乃至反省も自己傳統文化の自己目的的宣揚としてよりも、完全に内部的統一、近代的國家組織、政治的經濟的勢力増大等の爲の手段として彼が試みる所である。「中國建設」は宋家一統の致意であるとの觀方、蔣介石の地位擁護の爲の對日抗戰といふ解釋は滿更ひが、目とばかりいへない。若し、民族國家の建設が沒我的全體主義によつてこそ可能なりとすれば、如何に強力な獨裁組織を形成し、熾烈なる民族意識、民族主義、民族運動を以てしても、支那人が自力で性格的な民族國家建設に成功せんことはなかくに覺束ないであらう。

三 現代支那人性格の超剋

上述の如き典型的現代支那人の性格、從つて其の擴大圖として考られる現代支那の國民性が日滿支新秩序の建設に對する一の制約的要素として如何に障礙的、障礙除去的、乃至方向規定的に作用するであらうかの見透しは多く議論を経ることを要しないであらう。現に事變の進行、大東亞戰爭への擴大過程に於て、如實に其の制約作用は現れてゐる。

日滿支新秩序の建設は其の根本義に照し支那人性格の制約作用に對處して日支合作を具體的に一齣一齣刻んで行かなければならぬのであるが、第一、十全に障礙除去的な制約作用は安分性や忍耐や仄かなる大亞細亞主義理解等に見出し得るのみであつて、他の多くはむしろ障礙的要素か、さなくは日本側の態度如何に繋る所の條件付障礙除去的要素若くは方向規定的要素である。「社會人」として相互信認の關係の保たれ信義の行はれる人間關係を悦ぶは此の最後の要素の重要なものである。第二、支那人性格の制約作用は總じて頑固でうるさいものであつて、其の障礙的作用を超剋し、其の障礙除去的作用を積極的促進作用として振揮し、方向規定的作用を日滿支新秩序の根本義に沿ふ方向に誘導せんことは容易ならぬ。

支那人の心は水の如く田毎の月の如く柔軟で可塑性に富む様であつて而も極めて頑固である。固い心とはいみじくも巧みに表現したるものと思ふ。尊大性と民族意識とを核とする支那人の心組織の頑固さは實に堪へ難いものであつて、彼の心を眞底から一定目標に向けて超剋振揮誘導せんことは絶望に近い。

然れども、日滿支新秩序の建設は之を中核的なる小圈とする大東亞新秩序建設の鍵鑰である。日本と東亞との興廢の岐路である。不退轉の意氣を以て進まなければならぬ。

頑固なりと雖も支那人世界觀は固定不變ではない。歴史的にも變革を圖し、最近に於ても民族生活の發展を軸心として發展しつつある。故に、不退轉の意氣を以てすれば日滿支新秩序の建設に向けて支那人の心を超烈振擲誘導せんこと不可能ではない。藉すに年月を以てすれば、支那人世界觀を變革に導き、眞底から日滿支新秩序に對し全面的に障礙除去の因素たらしめんことも絶望ではない。支那人性格の頑固さにめげて、其の制約作用に隨從これ努むべき所以は斷じて存しない。

それには、日本自身の精神構造を反省して一段と「性格性」を高め、一層「信義」を昂め、以て支那人性格のかの條件付障礙除去の因素の爲に條件を供して一途に障礙除去的に作用せしめなければならぬ。のみならず、進んで、日本人自身の心を擧げて大東亞新秩序建設に對し障礙除去的の因素たらしめる様に全面的に日本人の性格を發揚振擲しなければならぬ。幸ひにして日本人の性格は支那人の性格とは違ひ、高度に可塑的である様に思はれる。

第二章 事變に現れたる支那人の世界觀

一 支那事變を繞る三大陣營

汪精衛氏の重慶脱出以來、日支は支那事變を繞つて「東亞新秩序建設」と「和平救國」と「抗戰建國」との三大陣營に分れて組んづはぐれつして遂に大東亞戰爭に突入した。謂ふまでもなく「東亞新秩序建設」陣營に立つはわが日本であり、「和平救國」陣營を率ゐるは南京國民政府であり、「抗戰建國」陣營を守るは重慶政權である。重慶の「抗戰建國」は長期抗戰に依つて「最後の勝利」を獲得せんとするものであり、南京の「和平救國」は抗戰の無意義なることを懼り、和を講ずることによつて支那の國土民生の危きを救ひ國家の存在を保たんとするものであり、日本の「東亞新秩序建設」は大東亞新秩序の中核的小圈として日滿支新秩序即ち善隣友好、共同防共、經濟提携の三原則に則る日滿支の恒久的な平和的關係を創造せんとするものである。南京と日本とは高邁なる大亞細亞主義を理解し、右善隣友好、共同防共、經濟提携の三原則に則つて事變を